

# 男性高齢者の老後の生き方に対する認識の構造 －クラスター分析法を利用した談話の内容分析から－

根岸 貴子<sup>1)</sup>, 田代 和子<sup>2)</sup>

了徳寺大学・健康科学部看護学科<sup>1)</sup>

淑徳大学・看護栄養学部看護学科<sup>2)</sup>

## 要旨

本研究は、定年後数年が過ぎた男性高齢者が老後の生き方に対して、どのように認識しているかについて、談話による発話からその態度構造を分析することを目的とした。分析対象は都市近郊に在住する男性高齢者30名であり、クラスター分析にて類型化した。サブカテゴリー水準のクラスター構造から、『過去の生き方に満足している』『現状維持を望んでいる』『一人暮らしは侘しい』『過去を回顧しながら老いをみつめている』『価値ある生き方を追求している』『元気に日々の生活を楽しんでいる』の6つの認識の構造が明らかになった。配偶者の存在、健康、仕事の要因が影響をしていることが示唆された。

キーワード：男性高齢者、定年後、老後の生き方

## Speech of Elderly Males' Recognition of Lifestyle Structure

### －Cluster Analysis Method－

Takako Negishi<sup>1)</sup>, Kazuko Tashiro<sup>2)</sup>

Department of Nursing, Faculty of Health Science, Ryotokuji University<sup>1)</sup>

Department of Nursing, School of Nursing and Nutrition, Shukutoku University<sup>2)</sup>

## Abstract

The purpose of this study was to analyse the attitude of elderly males who retired several years ago toward the way of life of old age from their utterances. The subjects were 30 elderly males living in the suburbs and were categorized using cluster analysis. Six types of attitude were recognized in terms of the sub-category level of the cluster structure: namely, "I was happy in the past," "I want to keep the current life style," "I am lonely alone," "While I remember the old days, I see that I am getting old," "I pursue a valuable way of living," "I enjoy every day life." It was suggested that the presence of their wife, health and work was an influencing factor.

Keyword : elderly males, post retirement, life in old age

## I. 緒言

わが国における高齢化率は平成25年に24.1%で過去最高となり、世界の中でも例をみないスピードで高齢化が進行している<sup>1)</sup>。平成23年の平均寿命は男性79歳、女性86歳となり、2015年には「団塊の世代」が65歳となり高齢者人口は一層増加すると見込まれている。高齢者の人口、平均寿命の延びと共に老年期の生き方が問われるようになってきた。高齢者が健康で幸福に暮らすには、主体者である高齢者自身の考え方

や生き方が密接に関係する。高齢者には衰退、喪失、病気などのマイナス・イメージがあるが、戦後60年以上経ち、高度成長期を担ってきた高齢者たちは違った見方もあると推測される。

心理学者エリクソンは、自身が高齢者になって初めて老年期の心理を描き、老年期の発達課題を「自我の統合と絶望」としている。老年期の自我の統合を人生の成熟の極として位置づけ、自分自身と自己の人生を受容し、死に直面することや心身の衰退からくる絶望感に対しても、与えられた人生に価値を見出すこととしている<sup>2)</sup>。岡本は、それ以前の中年期にも同じようアイデンティティの揺らぎがあり、それが老年期にもみられると報告している。彼女は60歳以上の男性高齢者に質問紙調査を実施し、老年期のアイデンティティの様態を定年退職の認知タイプに対比させ、積極的歓迎型、退職危機型、受動的歓迎型、危機継続型、あっさり移行型の5タイプに分類した。その中で、積極的歓迎型はどの段階であってもアイデンティティ達成が高いとしている<sup>3)</sup>。また、現役引退後にアイデンティティの再構築を遂げた者は、現在の生活に積極的に関与し高い充足感を獲得していると報告している<sup>4)</sup>。

一方、海外においては、次の2つの代表的な研究がある。カウフマン<sup>5)</sup>は、高齢者には年齢や肉体の条件を超越した固有のアイデンティティが維持されており、老年期でも絶えず自己を創造し続けること、若い頃のアイデンティティが絶えず変化しながらも維持し続けられると報告した。彼によって提唱されたこの概念は“エイジレス・セルフ”の名称で提唱された。同様にレビンソン<sup>6)</sup>は、人生半ばの過渡期に相当する中年期にも発達課題があり、その中年の危機を乗り越えた先に人生の最盛期が安定した形で形成されるとしている。

このような中で、高齢者の老後の生き方におけるquality of life（以下、QOLとする）の重要性に注目が集まり、やがてその概念はわが国にも“生活の質”と翻訳されて導入された。QOLの概念は海外では1970年代からその評価的態度を測定するための研究、特に主観的幸福感の研究が始まり、わが国でも古谷野<sup>7)</sup>によって日本版モラール・スケール尺度が開発され、多様な研究領域で使用されるようになった。80歳以上の入院患者の主観的幸福感、80歳代と90歳代の主観的幸福感のモラール得点には大きな差はなかった<sup>8)</sup>。

また長田<sup>9)</sup>は、75歳以上の地域の高齢者の主観的幸福感とその関連要因について検討し、モラール得点は男性が高く、性差を指摘した。一方、社会心理学系では、定年退職、すなわち現役の職業を退く時期に着目した研究が興味深い。例えば長田らは、都市の55歳以上の者を対象にした調査結果から、定年は解放感と直結した概念であり、必ずしも否定的なイメージで捉えられているわけではないとした<sup>10)</sup>。人間関係については、女性は多面的な人間関係を営んでいる反面、男性は配偶者中心で人間関係が狭い範囲にあるとしている<sup>11)</sup>。

以上のように、高齢者の生き方や認識を調査した研究には、特に定年後の主観的幸福感尺度や質問法を用いたものが多い。しかし、これらの尺度は概念化された指標に基づいて設計されたものであり、なぜ、どのようにそれらを認識した態度として備えているかについては明らかにされていない。概念化された指標から判別できる生き方を探索したいと考えた。すなわち、高齢者一人ひとりが老いることをどのように意味づけているのか、過去の個人的な体験が社会、文化的背景の中でどのように解釈されているかを個人の回想的な談話から老いの受け止め方を探索することとした。

## II. 研究目的

本研究では、定年から数年が経過し在宅生活を送っている男性高齢者が、老後の生き方をどのように意

味づけ暮らしているかについて、その認識の構造を明らかにすることを目的とした。

### Ⅲ. 研究方法

#### 1. 調査対象者

埼玉県在住の健康な在宅高齢者30名である。病院に定期的に通院している者が含まれるが、認知症はなく日常生活が自立した前期高齢者(65歳から74歳まで)16名、後期高齢者(75歳から84歳まで)14名である。調査対象者は筆者の知人とその紹介者であったが、その後「歩こう会」「ゲートボール会」「囲碁の会」「シルバー協会」に参加しているさらなる紹介者を得て、最終的に30名を確保した。面接を依頼する際には調査の目的を説明し、談話を録音することを含めて承諾の得られた者から聞き取り調査を開始した。

#### 2. 調査方法

面接調査に際しては、対象者から自由な回想や連想による談話を得るために、半構造化面接法による調査を実施した。調査期間は2009年8月から12月の5ヶ月間である。

聞き取りに際してはフェイスシートを用意し、家族構成、学歴、1ヵ月の収入、健康状態の自覚などを記入してもらった。一方、調査者用のチェックリストも用意し、家族構成、定年前の職業、定年の年齢、再就職の有無、などの項目を設け、面接中の談話で触れられない場合や談話の内容が散漫になったり拡散したりした時などに、質問の形で利用する際の備忘録として利用した。

面接の場所はシルバー協会や公民館の会議室、自宅などである。なお、面接時間50分から1時間30分であり、平均1時間12分であった。

#### 3. 面接調査

面接にあたっては、対象者が自由に話せるように配慮しながら傾聴することに徹しながら、まずプロフィールについて質問し、続けて今の生活の受け止め方、人生で大事にしているもの、生活心情、価値観などについて話してもらった。

#### 4. 倫理的配慮

面接調査の実施の際に、研究協力者に対して、研究の目的、意義について説明し、心理的に負担のある質問には答える必要のないこと、プライバシーの保護、途中でインタビューの中断及び中止ができることに関して、口頭と文書で説明した。その後、調査参加への同意を書面にて得た。面接中は研究協力者の体調を十分に配慮し、所要時間を90分以上超えないようにした。

#### 5. 分析方法

##### 1) 談話の内容分析によるカテゴリー化

談話の録音記録は全文を逐語録とし、一文一義の単文に分解し、これをコードと位置づけた。コード群を統合し「エピソード」水準、エピソード群を統合し「サブカテゴリー」水準と位置付けることとした。なお、カテゴリーの構造化をする作業には、筆者の他に2名のコーダー(看護教員)の参画を得て分類した。

##### 2) クラスタ分析

クラスタ分析とは、対象間の距離を定義して、距離の近さによって対象を分類する統計手法の一つである。なおクラスタとは、集団、群などの意味を持つ。生物学、心理学、社会学、認知心理学と適用範囲が広く、本研究は多くの談話コードを類型化するのに適していると考えた。

エピソード水準とサブカテゴリー水準における発話頻度の実数の行列表と、それらを発話の有無(1:0)に置換した行列表を作成し、クラスター分析(Ward法)を実施した。

#### IV. 結果

基本属性は表1に示した。

表1. 対象者の基本属性

ID	年齢	学歴	業種	企業形態	職種	定年(歳)	再就職	家族形態	介護	収入年金・他(月)	健康状態の自覚
1	78	大学	自動車会社	大手企業	社長	65	なし	夫婦	なし	31万以上	自信あり
2	72	高等小学校	化学薬品会社	大手企業	部長	60	なし	夫婦	なし	21~30万	自信あり
3	69	高等小学校	運送業	中小企業	社員	60	なし	同居	なし	11~20万	自信なし
4	70	高等小学校	自衛隊	役所	社員	58	あり	同居	なし	31万以上	自信あり
5	68	新制中学	出版会社	大手企業	課長	60	なし	夫婦	なし	21~30万	自信あり
6	77	大学	銀行	大手企業	役員	60	あり	夫婦	なし	31万以上	自信あり
7	72	専門学校	電力会社	大手企業	責任者	60	なし	夫婦	なし	21~30万	自信あり
8	78	旧制中学	自動車会社	大手企業	課長	58	なし	夫婦	なし	21~30万	自信あり
9	80	高等小学校	建設業	中小企業	社員	60	なし	夫婦	なし	21~30万	自信あり
10	81	高等小学校	信託銀行	中小企業	課長	55	あり	夫婦	なし	21~30万	自信あり
11	79	大学	化学薬品会社	大手企業	役員	70	なし	一人暮らし	なし	21~30万	自信あり
12	68	高校	保険会社	大手企業	支店長	60	なし	夫婦	なし	21~30万	自信あり
13	72	大学	記者	大手企業	社員	60	あり	夫婦	なし	21~30万	自信あり
14	71	高校	銀行	大手企業	支店長	68	あり	一人暮らし	なし	21~30万	自信あり
15	78	旧制中学	銀行	大手企業	支店長	68	あり	夫婦	なし	31万以上	自信あり
16	81	大学	研究所	研究所	所長	70	なし	一人暮らし	なし	21~30万	自信あり
17	81	師範学校	教師	学校	校長	60	あり	夫婦	なし	21~30万	自信あり
18	69	高校	製造業	大手企業	課長	64	あり	夫婦	なし	21~30万	自信あり
19	79	高等学校	印刷会社	大手企業	社長	70	なし	夫婦	なし	31万以上	自信あり
20	73	大学	出版会社	大手企業	取締役	65	なし	同居	あり	31万以上	自信なし
21	79	大学	銀行	大手企業	副部長	65	なし	夫婦	なし	31万以上	自信あり
22	75	高等小学校	包装業	中小企業	社員	60	なし	一人暮らし	なし	11~20万	自信あり
23	70	高等小学校	製造業	中小企業	社員	60	なし	一人暮らし	なし	21~30万	自信あり
24	82	高等小学校	自営業	中小企業		79	なし	夫婦・娘	なし	10万未満	自信あり
25	71	高校	銀行	大手企業	支店長	60	なし	夫婦	なし	21~30万	自信あり
26	69	大学	飲食点	個人経営	店長	63	あり	一人暮らし	なし	10万未満	自信なし
27	72	専門学校	県庁	役所	部長	60	なし	夫婦	なし	21~30万	自信あり
28	71	旧制中学	製造業	中小企業	課長	60	なし	一人暮らし	なし	11~20万	自信あり
29	77	大学	設計士	大手企業	相談役	65	なし	夫婦	なし	21~30万	自信なし
30	73	大学	教師	学校	校長	80	あり	夫婦	なし	21~30万	自信あり

注1)職種は退職時のものである。

クラスター分析（Ward法）による構造分析

逐語録から得られた単文は計3128のコードとして分離され、研究の目的に照らして関連性のないコードを削除して、2241のコードを分析の対象とした。コード化によって分類されたエピソード群は59、サブカテゴリー群は20である。表2に示す

表2 老後の生き方に対する認識の構造カテゴリー化

エピソード N=59	頻度	%	サブカテゴリー N=20	頻度	%
満足した生き方をしたい	16	0.7	充実した生き方をしたい	128	5.71
人の役に立ちたい	71	3.2			
何もしてないけどしたい	24	1.1			
本を読む	17	0.8			
考えて努力すること	35	1.6	新しいことに挑戦したい	121	5.40
挑戦の気持ちは充分	86	3.8			
毎日を忙しくしている	33	1.5	積極的に生きる	150	6.69
家の中にいるのはよくない	28	1.2			
地域で交流をはかっている	35	1.6			
積極的に外にでる	54	2.4			
プラス思考で考える	29	1.3	経験により悟る	91	4.06
経験してわかるようになった	27	1.2			
割りきる	35	1.6			
人間関係に気をつかっている	46	2.1	和を保つように配慮している	83	3.70
個人重視	18	0.8			
我を張らない	19	0.8			
妻への思いやり	35	1.6	妻へのいたわり	75	3.35
妻と一緒に旅行している	15	0.7			
妻と行動は別にして	25	1.1			
女性は活発でよい	20	0.9	異性は必要	57	2.54
女性の見方が変わった	12	0.5			
異性へのあこがれ	25	1.1			
人生の区切り	33	1.5	寿命を意識している	114	5.08
人生をまとめる	13	0.6			
死を意識する	61	2.7			
今後のことは考えられない	7	0.3			
過去の病気・ケガを乗り越えた	38	1.7	療養生活をしている	72	3.21
病気と付き合いながら生活している	34	1.5			
戦争体験は役にたっている	61	2.7	戦時中の経験は役にたっている	110	4.91
現代の教育への不安	49	2.2			
年金で十分に生活できる	40	1.8	年金を受けている生活に満足している	85	3.79
贅沢しない	45	2.0			
自分は若い	82	3.7	高齢者とは思っていない	102	4.55
若い頃の年寄りはずごく老けていた	20	0.9			
ボケたくない	16	0.7			
寝たきりになりたくない	39	1.7	人の世話になりたくない	109	4.86
自分のことは自分でやる	33	1.5			
今のことを継続する	21	0.9			
老化現象を感じている	49	2.2			
年を取ることに焦りを感じている	22	1.0	老いを受け入れている	200	8.92
年をとるのは自然	38	1.7			
無理しない	45	2.0			
孫はかわいい	30	1.3			
孫は疲れる	16	0.7			
仕事はたいへんだった	105	4.7			
子供の教育は妻任せ	13	0.6	一生懸命に仕事をしてきた	165	7.36
定年して仕事から解放された	47	2.1			
満足した仕事をした	39	1.7	充実した仕事をした自負がある	59	2.63
使命感をもって仕事ができ	20	0.9			
私の人生は助けられてきた	20	0.9	人生は幸運だった	52	2.32
自分は運が良かった	32	1.4			
ひとり暮らしは淋しい	20	0.9	伴侶の喪失を乗り越えていない	71	3.17
妻の死はとにかくショック	39	1.7			
妻の死を乗り越えるのに時間がかった	12	0.5			
好きな事をして楽しんでいる	95	4.2	日々の生活を楽しんでいる	209	9.33
友人との会話を楽しんでいる	114	5.1			
歩くことを心掛けている	59	2.6			
健康が一番	48	2.1	健康でいるように心掛けている	188	8.39
健康に気をつけている	81	3.6			



なお、以下の本文では、クラスター名は『 』、サブカテゴリー名は「 」, エピソード名は〈 〉の記号を使用して記述する。

エピソード水準におけるデンドログラムの収束性からの解釈は困難であったため、20のサブカテゴリーに対するクラスター分析とした。図1に示す。

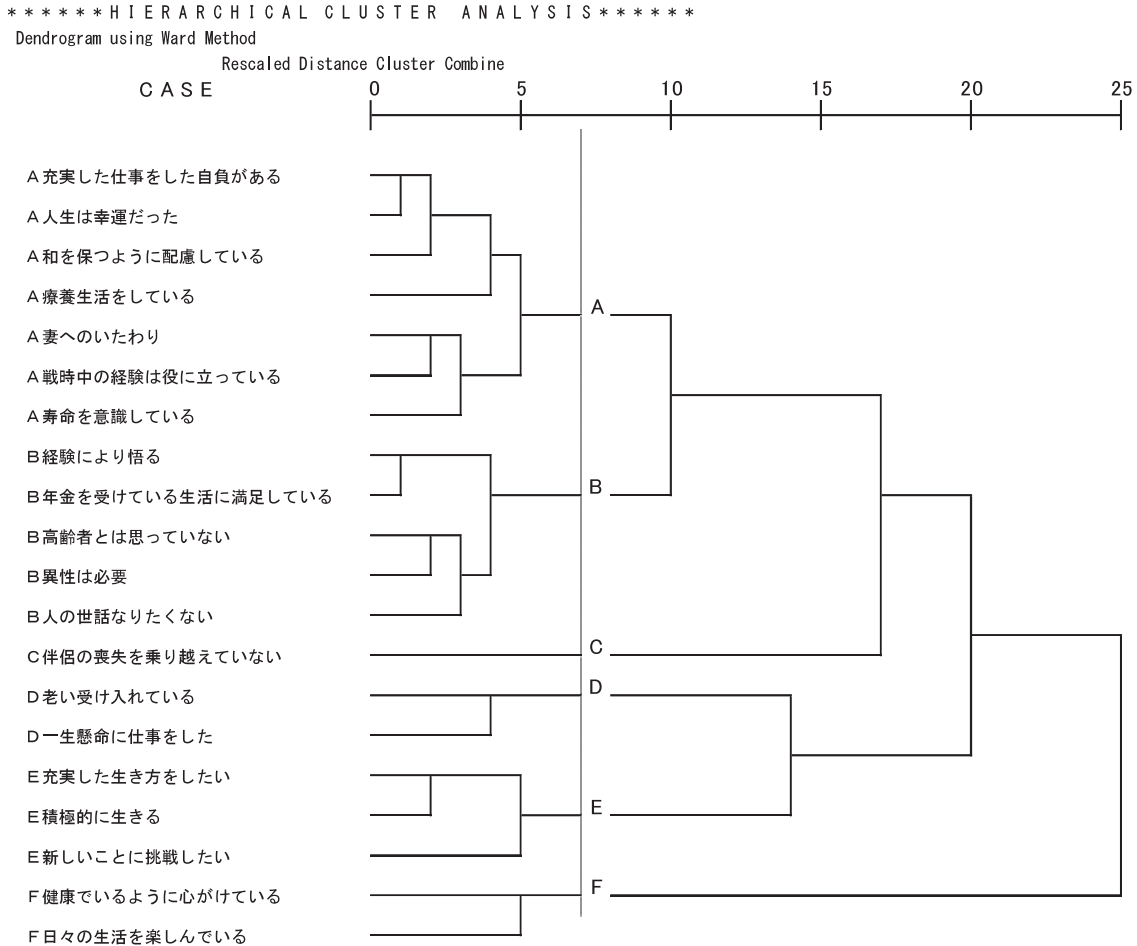


図1. サブカテゴリーのクラスター分析における樹状図

クラスター分析からは、クラスターの収束性からデンドログラムを6クラスターに分割し、上から順にクラスターA～Fと命名した。以下、各クラスターについて特徴を述べる。

### 1. クラスターA 『過去の生き方に満足している』

「充実した仕事をした自負がある」「人生は幸運だった」「和を保つように配慮している」「療養生活をしている」「妻へのいたわり」「戦時下で学んだことは役に立っている」「寿命を意識している」の7サブカテゴリーから構成され、発話頻度が最も多いクラスターとして分割された(523コード:25.5%)。過去を回想し、仕事や人生に満足と感謝の気持ちが表わされたコード群が収束している。また、寿命を意識し、他者に対する思いやりや妻をいたわる気持ちなど結合し、戦争体験が後の仕事や生き方に意義があったことなどの認識もここに含まれた。特徴は病気体験に関するコード群である。過去に病気を乗り越え、または病気と付き合いながら暮らしてきたという認識は、過去の生き方を回想する中で病気体験を肯定的に捉えたものとして、このクラスターに収束して結合したものと考えた。以上のことから、クラスターAは、過去の人生を肯定的に捉え、感謝と満足の気持ちを回想したコードの集積であり、これを『過去の生き方に満足している』と命名した。

## 2. クラスタ B 『現状維持を望んでいる』

「経験より悟る」「年金を受けている生活に満足している」「高齢者とは思っていない」「異性は必要」「人の世話になりたくない」の5サブカテゴリーから構成され、2番目に発話頻度の高いクラスターとして収束した(401コード:19.5%)。経済的にも身体的にも自立した生活を送っていることに対する自負と満足感が表わされており、過去の経験から良い生き方をするための悟りが示されている。特徴は異性の必要性を認識したコード群である。これは、自立して生きる際には配偶者の存在の有無には意味があり、その気持ちがこのクラスターに収束して結合したものと考えた。以上のことから、クラスター Bは、現在の自立した生活の暮らしに満足した気持ちと、この状態が今後も続くことを祈念した信念が集積したコード群であり、これを『現状維持を望んでいる』と命名した。

## 3. クラスタ C 『一人暮らしは侘しい』

「一人暮らしは淋しい」の単独のサブカテゴリーからなっている。発話頻度は71コード(3.0%)で、コードには妻を亡くした生活の不憫さと侘しさが表されている。その意味において、『一人暮らしは侘しい』と命名した。

## 4. クラスタ D 『過去を回顧しながら老いをみつめている』

「老いを感じている」「一生懸命に仕事をした」の2サブカテゴリーから構成されている。発話頻度は345コード(16.8%)で、仕事に没頭してきた人生を回想しながら、同時に過去の若い時分の人生との対比から自らの老い実感したコード群が収束している。そこでクラスター Dは『過去を回顧しながら老いをみつめている』と命名した。

## 5. クラスタ E 『価値ある生き方を追求している』

「充実した生き方をしたい」「積極的に生きていた」「新しいことに挑戦していきたい」の3サブカテゴリーから構成され、発話頻度は394コード(19.2%)であった。これらは、自己の価値の承認や人生を満足できるものにするために、積極的に行動して人の役に立つことを念願した気持ちのコード群が集合したものであり、自己実現を認識しながら積極的に生きようとする気持ちが集積したクラスターであると考えられる。そこでクラスター Eは『価値ある生き方を追求している』と命名した。

## 6. クラスタ F 『元気に日々の生活を楽しんでいる』

「健康でいるように心掛けている」「日々の生活を楽しんでいる」の2サブカテゴリーから構成され、発話頻度は366コード(17.9%)であった。健康でいることが日々を楽しく暮らすことにつながると意識したコード群が集積しており、他者との会話や人間関係を大事にしながら生活を楽しんでいることを表したものと解釈された。そこでクラスター Fは『元気に日々の生活を楽しんでいる』と命名した。

以上のことからクラスターの収束性を解釈すると、クラスター Aとクラスター Bは過去と現在の生活に対する満足感が同階層で結合し、またクラスター D・Eは老後の生き方とその受け止め方の認識が同階層で結合して収束し、クラスター Cは独立したクラスターとして分類された。これらすべてクラスター F『元気に日々の生活を楽しんでいる』に収束しており、この全体像を老いの認識の構造とすることとした。

## V. 考察

本研究は、男性高齢者が老後の生き方に対してどのような認識をもち、態度を備えているのかについて、調査的面接を通して探求したものである。サブカテゴリー水準のクラスター構造から、男性高齢者の老後

を生き方に対する認識の構造についてクラスター分析をし、『過去の生き方に満足している』『現状維持を望んでいる』『一人暮らしは侘しい』『過去を回顧しながら老いをみつめている』『価値ある生き方を追求している』『元気に日々の生活を楽しんでいる』の6つの認識の構造が明らかになった。以下、それぞれの特徴について考察する。

#### 1. 老後の人生の意味づけの基本的態度

クラスターA『過去の生き方に満足している』は、戦中・戦後の社会が貧しかった時代や困難や苦勞の体験などが、今となってみれば良い体験と認識した意味づけが反映していた。戦時中や戦後の体験をプラス体験として捉え、過去の人生を肯定的に意味づけることは、その時代を生きた証人としての自己証明であり、歳をとった今において過去の自分を肯定することで生きる原動力としていると考える。〈経験から悟りを得た〉という発話が収束したのも、人生に大切なものは何かという自己への問いかけからの洞察である。その認識を補完するかのように、〈家族や仲間の和を保つこと〉〈妻をいたわることへの配慮〉が収束する。過去の人生に満足していることのゆとりが感謝の気持ちを生み出している。エリクソン<sup>2)</sup>が提唱した老年期の発達課題としての人生の再統合をみることができる。

クラスターB『現状維持を望んでいる』も対象者に共通に備えられた態度である。しかも、発話頻度も高い。その背景には、老齢年金の受給者としての生活に満足していること、すなわち家族の経済扶養に頼らなくても、少なくとも生活の基盤は確保されていることが大きな要因であることが想像される。しかし、異性として捉えた配偶者の存在の意味に対する認識がここに収束したことは興味深い。男性の高齢者において、身の回りの世話をしてくれた妻の存在が、高齢者となって改めて見直す機会を与えているものと考えられる。妻と死別したり離婚した者を周囲に見る機会も増え、妻の存在価値がより一層強く意識されるのであろう。〈女性の見方が変わった〉〈女性は活発でよい〉は、異性としての女性に憧れるなどの発話がそれを裏付ける。

一方、クラスターC『一人暮らしは侘しい』は、妻に先立たれた一人暮らしの者の発話が中心である。現実には、一人で暮らす侘しさと妻のいない悲しみが表わされている。本研究では、一人暮らしになってからの期間の差によって、満足と不満足にグループに分類された。後者の者は配偶者と死別して3年未満の者である。独居期間が短い者は悲嘆の過程の最中にある者も含まれる。単身者の生活支援の施策を考える際、独居期間に目をむけることも必要である。

次のクラスターD『過去を回顧しながら老いをみつめている』は、「一生懸命に仕事をした」という認識コードと収束している。現役時代は仕事中心の生活であったが、退職後の人生は“仕事をしていないイコール現役ではない”という認識からもより老いを感じやすくなる。それは、現役時代の〈仕事は大変であった〉というエピソードが全体の2番目に多いことから推測される。その意味では、男性高齢者の生き方は、仕事を通して態度を形成してきたとも言えよう。反面、老いを受容した気持ちも随所に現れ、〈歳をとるのは自然〉と特に高学歴の者や後期高齢者に発話が多く、歳を重ねる度に心の準備をしていると捉えられた。

クラスターE『価値ある生き方を追求している』は、「充実した生き方をしたい」、「新しいことに挑戦したい」「積極的に生きたい」ことを意味した発話が収束した。前向きな発言で挑戦の気持ちは十分に蓄え、人生が完結するまでの間は、限りなく自分の人生を創造し続けたいという意識が表されている。これは、カウフマン<sup>3)</sup>が提唱している“エイジレス”の認識が日本の高齢者にもみられることを示唆している。



最後に、クラスターF『元気に日々の生活を楽しんでいる』という現実の生活や暮らしぶりが表現され、「健康に心がけていること」「日々の生活を楽しんでいる」ことなどが収束する。全体でも最も発話頻度が高く、しかも全員のコードにみられた。その根底には「健康が一番」「健康のために歩いている」と健康であることを重要視していた。出村ら<sup>11)</sup>が在宅高齢者の生活満足度は、身体的健康度に対する満足度が最も高く、特に男性の方が高いとしているが、「日々の生活を楽しんでいる」という認識の源が健康であり、男性高齢者の生活満足の基盤でとも言うことができる。

以上の考察から、男性の高齢者が認識している老年期に対する認識を6つに類型化することができた。これらは、厳密な意味での集団の類型を意味するものではないが、高齢者が備えているであろう生き方の態度を分類することをできた。

## 2. 高齢者の生き方の認識に影響する要因

高齢者が自身の生き方を態度として備える際、それに影響する要因について考察する。

### 1) 配偶者の存在

本研究からは、配偶者を喪失して3年未満の対象者は喪失からの悲しみの最中にあり、しかも生活全般に困難さを感じている状況が浮上した。また同時に、男性高齢者の談話には、幸せに暮らしていくには妻や異性の存在が必要だという認識も浮き彫りにされた。配偶者が健在であっても妻や異性としての女性に目が向けられた認識が豊富に語られたということは貴重である。これまでの調査研究では指摘されたことのない認識であり意義深いものと評価される。

### 2) 健康

対象者全体からみると、現在、健康問題もなく比較的支障なく幸せに暮らしている者で占められ、全体の75%にも相当した。多くの者は健康に心がけており、発話頻度でも3番目に高い。つまり、健康が維持されることによって高齢者の主観的幸福感が高められていることを意味しており、これが老後の生き方に影響する最も大きな要因<sup>8)</sup>であり、古谷野ら<sup>12)</sup>が示唆した活動性と関連する影響要因である。

### 3) 仕事

男性高齢者は、現役時代の仕事に対する評価が老後の生活にも大きく影響することが示唆された。現役時代の仕事の内容、取り組み方、役職などの要因が階層を形成したのである。つまり、仕事を通して形成してきた自己像が、老後の生き方にも反映することを意味している。しかし、老年期は加齢現象、病気、配偶者との死別など、仕事を通して形成してきた自己像を変更せざるを得ない。その意味では、仕事を通して育んできた自己像を多少変化させながら、自己を創造発展させているものと考えられる。

以上3つの要因は、高齢者が生きていくうえで生き方を左右する影響要因として重要であることが示唆された。

## VI. 結論

本研究は、男性高齢者の老後の生き方に対する認識の構造の類型化を試みた結果、以下の結論を得た。

1. 老後の生き方に対する認識の構造は『過去の生き方に満足している』『現状維持を望んでいる』『一人暮らしは侘しい』『過去を回顧しながら老いをみつめている』『価値ある生き方を追求している』『元気に日々の生活を楽しんでいる』の6つに類型化できた。

2. 配偶者の存在, 健康, 仕事が老後の生き方に影響している要因であることが示唆された。

## Ⅶ. 本研究の限界

本研究は健康状態も比較的安定しており, 生活も自立している対象者を選択したが, 以上の結果が高齢者の平均像を意味しているとは言い難い。今後は, 病気療養中や介護施設の利用者にも対象の範囲を広げ, 研究を発展させる必要がある。

## 謝辞

本研究を実施するにあたり, 面接調査に快くご協力いただいた男性高齢者の方々に深く感謝いたします。

## 引用文献

- 1) 内閣府編：第1節高齢化の状況 平成25年版 高齢者白書（概要），総務省ホームページ，  
<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/gaiyou/index.html>.
- 2) E H エリクソン, J M エリクソン & H Q エリクソン（朝永正徳 朝永梨枝子訳）（2000）老年期－生き生きしたかわりあい－, みすず書房, 東京. 9-56.
- 3) 岡本祐子（2002）中年からのアイデンティティ発達心理学－成人期・老年期の心の発達と共に生きることの意味, ナカニシヤ出版, 東京. 155-175.
- 4) 岡本祐子（1998）現役引退危機から見た老年期のアイデンティティ様態と心理社会的課題達成の特徴. 広島大学教育学部紀要（第2部）. 47, 141-148.
- 5) シャロン・カウフマン（幾島幸子訳）（1988）エイジレス・セルフ－老いの自己発見－, 筑摩書房, 東京. 3-23.
- 6) ダニエル J レビンソン（南博訳）（1980）人生の四季－中年をいかに生きるか－, 講談社, 東京. 277-372.
- 7) 古谷野亘（1981）生きがい測定-改定 P G C モラルスケールの分析-老年社会学. 3, 83-95.
- 8) 池田敏子, 近藤益子, 桜井桂子ほか（1995）高齢者の主観的幸福感に関する研究-90歳以上の特徴-. 岡山医療短期大学紀要. 6, 35-40.
- 9) 長田篤（1999）地域後期高齢者の主観的幸福感とその関連要因の性差. 日本老年医学会雑誌. 36（12）, 868 - 873.
- 10) 長田久雄, 安藤孝敏（1998）定年退職が精神健康と主観的幸福感に及ぼす影響. 産業ストレス研究. 15（2）, 106-111.
- 11) 出村慎一, 野田政弘, 南雅樹ほか（2001）在宅高齢者における生活満足度に関する要因. 日本公衆誌. 48（5）, 356-366.
- 12) 古谷野亘, 岡村清子, 安藤孝敏ほか（1995）都市中高年者の主観的幸福感と社会関係に関連する要因. 老年社会学. 16（2）, 115-124.

（平成25年11月28日稿）

査読終了年月日 平成25年12月2日